

ハブ血清投与を行うタイミングと身体障害合併症との関連について

ハブ咬傷患者は、減少しているものの最近でも年 60 件程度発生しています。重篤な合併症として、ハブ毒素に伴う細胞壊死で筋区画が腫脹し、その中にある筋肉、血管、神経などが圧迫され循環不全に伴う筋壊死や神経麻痺を起こします。(コンパートメント症候群と言います。)治療である筋区画を除圧する手術(減張切開と言います。)を行っても機能障害を起こすことは散見され、そのような合併症を起こさないように治療することは重要です。

ハブ咬傷患者における治療は、ハブ抗毒素血清の使用が主ですが、その高い副作用の報告から、医療機関はその投与に対して、腫脹や疼痛などの症状経過を見てから血清投与の判断をすることが通例です。しかし、その経過を見る時間に根拠のある数値は存在しません。

そこで今回私たちは、沖縄県が集めているハブ咬傷患者の患者調査票データを用いることにより、受傷からハブ血清投与までの投与時間と身体的後遺症の有無との関連について検証することを目的とした研究を行っています。

調査の対象者は、1977 年から 2015 年までの沖縄県内の医療機関受診後の環境衛生研究所に提出する患者調査票に記載された事例となります。

個人が特定できる情報は削除されたデータを使わせていただきますので、対象者のプライバシーが侵害されることはありません。また「個人情報の保護に関する法律」「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」ならびに「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」を遵守して行います。なお、本調査は京都大学医の倫理委員会の審査を受け、京都大学の長の承認を受けて実施されます。

ご理解を何卒よろしくお願いいたします。

令和 1 年 10 月 24 日

京都大学大学院医学研究科 予防医療学分野

木全 俊介

連絡先(メール): kimata.shunsuke.76x@st.kyoto-u.ac.jp